〈書評〉

書評：飯倉　章
『黄禍論と日本人――欧米は何を嘲笑し、恐れたのか』
中央公論新社、2013 年

森　　雅　雄

本の腰巻というものは、人間の衣服がその本体の分かち難き一部となっているようには本の一部となっていないのかも知れない。しかし、本の標題がそうである程度にはその本体を表象していると言えるだろう。従って、書評子がこれを玩味することもその任務の一部と見なしてもよいのではないだろうか。少なくとも読者の目が最初に向かうのは蹴出しの方で、いきなり本体に手を伸ばすのはむしろ無粋というものであろう。

その腰巻には本書から採られた、日本を表象する 6 枚の図像が配され、「サル、キツネ、ゲイシャ……日本は昔も今も異形だ」の惹句があしらわれている（下図）。読者は本書に西洋から見られた日本像、ひいては西洋と日本の間に横たわる汎時的な文化構造を期待するようにし向けられるのであるが、腰巻を解いて本体を目にすれば、それは忽ちに裏切られることになる。「はじめに」で著者は、本書の目的は「そのような人種主義に裏打ちされた『黄禍』としての日本・日本人イメージが、主に欧米の新聞・雑誌の図像、とくに諷刺画のなかで、どのように表象・表現されていったかを明らかに

するものである」（p.ii）と述べているが、「そのような人種主義」とは「近代的な人種概念に裏づけられた人種主義」（p.i）であり、また標題にもなっている「黄禍思想は、日清戦争後に流布したもの」（p.ii）なのであって、つまり歴史的な産物だと言っているからである。しかも、黄禍については「時々の国際関係のなかで、日本を支持したり頼りにした国々において、『黄禍』をパロディ化して嘲笑ったり、批判している諷刺画もたくさん描かれた」（p.ii）といっているから、更に微細な政治ゲームの所産でもあるのである。文化論なるものがともすれば大掴で図式的な議論に流れる傾きがあるのに対して、日露戦争の開戦経過の考証のように（pp.116-118）諷刺画を直接解説しない余事に及ぶこともあるけれども、歴史を形成する文脈の「厚い記述」に向かう姿勢は評者の好むところである。

しかし、なにごとにも本論の前になすべきことがある。それを丁寧にいたすことは本論を円滑に進めるために肝要のこととされているけれども、序章は些か淡泊の気味があるように思われる。諷刺が必要になる状況について、著者は、言論抑圧への対抗手段とユーモアやウイットへの嗜好を揚げる（p.4）。それがこの 2 つしかないのならば、本書の場合は、日本を支持した国において「黄禍」を嘲笑したというのだから後者に決まっているが、嗜好で説明を終えてしまっては余りに簡単に底入れがなされてしまうように思う。「ユーモアやウィットは、西洋では紳士の嗜み」（p.5）であり、諷刺画の「『読者』の多くは当時、読者階級とも呼ばれたインテリである」（p.7）。それが 19 世紀に入ってから「知識人から大衆までを巻き込んだ文化」（p.5）になったという記述に、我々は社会学的テクニックを期待して身構える。「印刷・出版技術の発展」への言及もあり（p.5）、韓程善などは、日本帝国の諷刺画を分析した本の中で、印刷・複製技術によって「大衆文化」が発達したと述べているのであるけれども（韓・韓　2010:12-13）、本書においては、これは結局、焦らされただけに終わる。

また、人種の違いへの注目についても、著者は「一七世紀の終わり頃から一八世紀の半ば過ぎにかけて、西洋の国々（と遅れて日本）が、国民国家として統合されていった。この統合のプロセスは、同時に人種国家（race-state）への統合という性格も持っていたと考えられる」（p.8-9）と述べている。しかし、寺田和夫によれば、19 世紀の段階でもその時代を代表するゴビノーの人種主義は「国家の枠をこえた」もので「まだ国家主義と結びつ」（寺田　1967:166）いてはいなかった。ゴビノー研究家のビッディスもその頃について「ヨーロッパ人の大多数によって人種間の関係が殆ど全く一義的な関心事ではなかった」と述べている（寺崎　1980:34 からの孫引き）。これが「国家間の対立意識、敵愾心をかきたてるための国家＝人種主義に変わった」のは、普仏戦争のあと、20 世紀になってからのことで、「普通選挙による大衆の政治参加」もこの人種主義の流行のもとになった（寺田　1967:186）というのであるから、これは大衆社会論とも平仄は合うのである（寺田の本は本書の参考文献にも入っている）。

第 1 章は、日本が世界へ登場した日清戦争期を扱う。イギリスの政治状況を描いた最初の 1 枚を除いた 18 枚の諷刺画のうち、日本をちょんまげ姿のサムライとして描いているのは 9 枚、軍人としているのは 5 枚で、サムライの方が多い。韓相一は、征韓論争を描いた錦絵について、「明治の指導層は、みな西洋式の軍服を着用して靴を履き断髪である。彼らの姿は日本人というより西洋人に近く描写されている」（韓・韓　2010:34）と述べており、西洋による日本人像と日本人による自画像との間のズ

レがあるのは興味深い。

日本の陸軍が平壌を占領し、海軍が黄海海戦に勝利した後の諷刺画（図 1-6）では日本は軍人として描かれており、「日本はサムライではなく、軍人として描かれ始めた」（p.21）という指摘は、これ以降の章の図像を見る限りでも正しいようだ。三国干渉では日本に対する共感は示されないが英国は不介入の態度を取った。先に述べたように、同じ日本像を描く均一な西洋があるわけではないことになる。同時に、諷刺画が時の権力の意向に楯突いたものでないことも分かる。

第 2・3 章は黄禍を扱う。書名から言えば、この 2 つの章が本書の中心ということになるのだろうか。黄禍論が一般の注目を惹き、黄禍という文字が盛んに使用されるようになったのはドイツ皇帝ヴィルヘルム 2 世による〈黄禍〉と題された寓意画によるもので、それは三国干渉に前後して描かれた、あるいは三国干渉に影響を与えたという通説に対する再検討は、その語源と日本への紹介の考証と合わせて綿密である。黄禍図は皇帝が親しく描いた諷刺画であるから、諷刺が権力に楯突くものでない最良の事例ともなる。

第 4 章は義和団事変期を扱う。日本を表象している 10 枚の諷刺画のうち、サムライは 4 枚、軍人は 3 枚。その比率は限りなく五分五分に近づいている。残り 3 枚のうち 1 枚（図 4-13）は「猿のような姿」（p.98）として描かれている。「のような」であるからサルそのものではないけれども、異形の日本はここで「のような」姿としてフェイド・インしてくるので、与えられたデータの限りでは「昔も今も異形」なのではないのである。

第 5 章は日英同盟期を扱う。日本を描いた 10 枚のうち、サムライは 1 枚、戦乙女が 1 枚[1]、軍人は 3 枚で、軍人の数が逆転して上まわっている。また、サムライといっても役者絵の如きもので、言及の階梯が上がっており、サムライが直接、日本を表象する記号となっているわけではない。他に、腰巻が言及するキツネが 2 枚に登場し（図 5-5、図 5-6）、「キツネとなった日本」の小見出しもあるけれども、2 枚とも他の国も動物で表象されており、これをもって日本の異形というならば、他の国も異形ということになる。しかも、本書でキツネが登場するのはここだけで、これ以後はない。なお、図 5-10 はイヌとなっているが、米英もイヌである。

第 6 章は日露戦争期を扱う。日本を描いた 15 枚のうち、サムライは 2 枚、軍人は 6 枚。数量の点だけではなく、質的な観点から言ってもこの時期サムライのイメージが肯定的に変化したという指摘（pp.140-141）は興味深い。軍人が描かれている 1 枚（図 6-3）にはゲイシャも登場している。ゲイシャの図はもう 1 枚ある（図 6-19）。『蝶々夫人』の初演は、日本軍が仁川上陸を開始し旅順港外のロシア艦隊を奇襲した 9 日後のことである。この頃からゲイシャが日本の表象として使われるようになったのであろうか。但し、評者は、ゲイシャは日本人のメトニミーなので、「異形」だとは思わない。異形については、この章には「不気味な怪物、日本」の小見出しを立てた 1 節があり、3 枚の画が紹介されている。そのうちの 1 枚は腰巻にも採られた「黄色い悪魔」（図 6-6）である。腰巻にある 6 枚は全てこれ以降のもので、腰巻意匠家のオリエンタリズムのお眼鏡に叶う図像が登場するのはこれ以降の時期ということになる。

第 7 章は日露戦争後の日米関係を扱う。日本を描いた 19 枚のうち、サムライは 3 枚、軍人も 3 ない

し 4 枚。軍人の比率が下がっているのは直接、戦争を描いたものではないからであろう。軍人を描いた 1 枚はアメリカの大型キャンディーを口にくわえたもので（図 7-6）、腰巻にも取り上げられたものであるが、「異形」と言えるのかどうかこれも疑問である。他にはサルが 2 枚、そのうちの 1 枚は腰巻にも採られている（図 7-20）。ハチで表象されているものもある（図 7-1）。

第 8 章は第 1 次世界大戦期を扱う。日本を描いた 31 枚のうち、サムライは 2 枚、軍人は 12 枚で、軍人の数がサムライのそれを圧倒している。そのうちの 1 枚は爆発物を作っている軍人（図 8-19）で腰巻にも採られたものであるが、これも「異形」とは思われない。他にゲイシャを描いたものが 2 枚ある。サルの図も 3 枚あって、「日本人は猿」の小見出しのある 1 節もあり、著者は「日本＝猿というイメージは、日本に対する敵愾心が高揚した時に繰り返し現れるものであった」（p.185）と述べている。但し、図 8-21 では日本だけでなくイギリスもサルで描かれている。

第 9 章は第 1 次世界大戦以後の時期を扱う。日本を描いた 12 枚のうち、サムライは 1 枚、軍人は 3 枚。その他に、ゲイシャとサルを描いたものも 1 枚ずつあり、両方とも腰巻にも採られている。

改めて結章はないので、歴史叙述が本書の真面目であることが再確認できる。本書の終わり頃、結論めいた雰囲気が漂う辺りにも、「黄禍論のなかに表れた日本・日本人像がそうであったように、時々の政治外交や経済関係によって、〔日本の〕イメージが大きく揺らぐことがありうる」（p.243）と述べられていて著者の立場があらためて確認できる。評者も賛成である。歴史的文脈や政治・経済で説明できるものはそうすればいいので、文化の如き余分なものを持ち出して説明を迂遠にする必要はないというのは近代合理主義の作法である。

その少し前には、「太平洋戦争中、〔……〕アメリカの諷刺画のなかで日本人は〔……〕猿や昆虫といった異形の姿で描かれることになるのである」（p.242）と述べられている。「異形」という言葉は、本書ではここだけに登場するけれども、これが腰巻意匠家の琴線に触れ、「昔も今も」と筆を勇めたのであろうか。文脈を見れば、「太平洋戦争中」のことであり、前述した第 8 章の「日本＝猿というイメージ」の話の直前に言及されているのも太平洋戦争期のものである。

著者が「異形」として挙げているのはサルや昆虫だけなので、キツネもそうだと考えているのかどうかは分からない。しかし、キツネの例は、日英同盟期に登場するので、本書から判断する限りでは、サルが本格的に登場する前の時期になる。何よりキツネの場合は日本以外の国々も動物で表象されるので、異形でも何でもない。著者はイソップの寓話に言及しているが、ここで動物たちが用いられているのはその動物の特徴とされるものの違いが各国の違いを考えるのに好都合だというトーテミスム的思考によるものに過ぎない。昆虫については著者は「異形」と考えているのだけれども、図 7-1 のハチの例は、その刺すという特徴が生かされているので、その意味ではキツネの場合と同じである。日露戦争期の「不気味な怪物」「ミカド蟹」においてもそういう面はあるのであって、その鋏が各国を挟む表象として便利なのである。

サルの場合はこれとは違って、刺さず、挟まず、その特徴は（人間に似ているがゆえに）人間ではないという以外にはなく、人間との対立関係において表象するものである。そして、イソップ寓話的なキャラクターが同じ準位に並んでいるのに対して、サルと人間は異なる準位に立っている [2]。サル

は人間より一段遅れたものとして見下すべき存在なのである。従って、進化論はその当時スキャンダルでもあって、ダーウィンにオランウータンの姿をさせた諷刺画もある。クリステヴァの用語を借れば、これはアブジェクシオンであろう（クリステヴァ　1984）。著者が語る黄禍論のジレンマ――日本人や中国人が劣等人種ならば脅威ではない。脅威ならば我々西洋人と同じ存在になる――（pp.9-10）もそういうメカニズムに違いない。また、ダーウィンの進化論は、フーコーによれば、キュヴィエによる「根元的不連続性の導入」が可能にしたものでもある（フーコー　1974:295）。ならば、この「中公新書史上、最多となるかもしれない図版」（p.248）の博物学的配列が自ずと示すものは、イソップ寓話的表象から「根元的不連続性」への他者表象の変容であるようにも思われるのである。

【注】

1. 著者は、ブリタニアと親しげに語り合う軍装した日本女性の奇妙さを指摘し、日本にはワルキューレに類するイメージがほとんどないからと述べている。しかし、ここでは偶々ブリタニアが武装しているから戦乙女にしたので、マリアンヌが相方ならばそうする必要はなかったであろう。また、日本にワルキューレはいないかも知れないけれども、女軍や巴御前はいる。ただし、ブリタニアのカウンターパートは天照大神であろう。ブリタニアと軍事バランスを取りたければ、天照に武装させればよいだけだったのだし、事実、同じテーマを日本人が描けばそうなる（天照は和風トライデントを手にしている）（韓・韓　2010:123）。なお、日韓の文脈では神功皇后でもよいし、そういう諷刺画もある（彼女は弓を手にしている）（韓・韓　2010:iv）。
2. 著者の動物名の表記に漢字と片仮名の両方が使われているのは、この違いを示しているのだろうか。それとも混用しているだけなのだろうか。

【参照文献】

クリステヴァ，ジュリア　1984　『恐怖の権力――〈アブジェクシオン〉試論』法政大学出版局。

寺崎章二　1980　「ゴビノーと『人種不平等論』の思想――トックヴィルと対比しつつ――」『東海大学紀要文学部』34。

寺田和夫　1967　『人種とは何か』岩波書店。

韓相一・韓程善　2010　『漫画に描かれた日本帝国――「韓国併合」とアジア認識』明石書店。

フーコー，ミシェル　1974　『言葉と物――人文科学の考古学』新潮社。